

<文献紹介>ロイル, S. A. 著, 中俣均訳 『島の地理学 : 小さな島々の島嶼性』

MAEHATA, Akemi / 前畑, 明美

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

54

(開始ページ / Start Page)

81

(終了ページ / End Page)

83

(発行年 / Year)

2022-03-20

【文献紹介】

ロイル, S. A. 著, 中俣 均 訳 (2018年8月発行)

『島の地理学——小さな島々の島嶼性——』

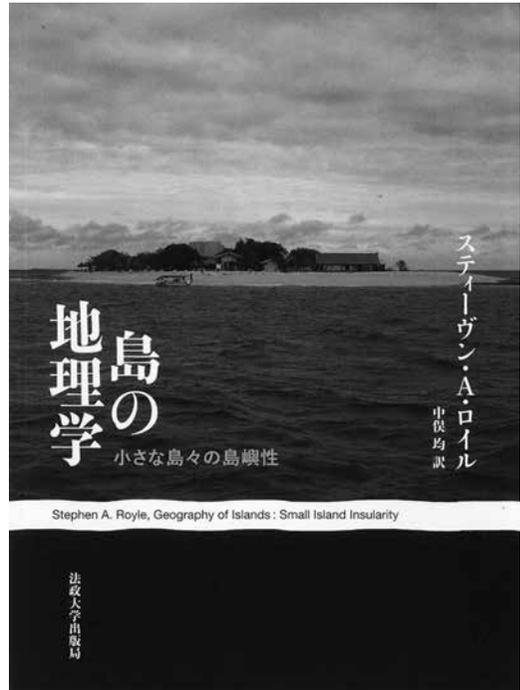
法政大学出版局, 308 + 18 + viii p, 定価 4,400 円 (+税)

本書は, Stephen A. Royle によって 2001 年に上梓された *A Geography of Islands: Small Island Insularity* の全訳書である。スティーヴン・ロイル氏は, 北アイルランドの東部, ベルファストにあるクイーンズ大学の地理学者であり, アイルランド地理学協会の会長も務められている。氏によると, 島の研究は, 1974 年にアイルランド島南西部の沖合に位置するダーゼイ島を訪れた際に, 島の荒廃を目の当たりにしたことが出発点になっているという。三大洋をはじめ地中海やカリブ海, 日本の島々など, 2016 年時点で世界の 864 の島を訪れていると記されている。本書でも, 著名な島はもちろんのこと, 南大西洋のセントヘレナ島やトリスタン・ダ・クーニャ島など, 日本列島からは遥か彼方と思われるような珍しい島々にも読者を誘っている。

ロイル氏自身は, 本書の目的について冒頭で次のように述べている。世界に広く分布する多様な島々について, 「島嶼性 (insularity) のために, どこでも共通した制約に苦しんでいるのを示すこと」(p. 3) であるという。ここで考察対象とされている島々は, グレートブリテン島や本州規模の島ではなく, さらに小さな島々であり, 多島海のマイクロ・アイランドも数多く登場してくる。その探究の先にあるものは, 海の誕生とともに存在している「島」の普遍的な性質——「島嶼性」の解明である。つまり本書は, 陸地の原形ともいえる島の本質にせまっていくな島嶼地理学の成果であり, 数年間のフィールドワークに基づく世界の島々の膨大な情報が, この 1 冊の中に盛り込まれているのである。

このように「島嶼性」を議論の中心に据えつつ, 島嶼の国際比較を試みている本書を紹介していくにあたり, まずは待ちに待った本書との出会いから述べようかと思う。筆者が初めて本書を手にしたのは, 2018 年 8 月下旬の日本島嶼学会東京大会 (於: 法政大学) の直前であり, 訳者である中俣均先生が当時学会長として多忙を極めておられた頃であったと記憶している。まもなく, 類書がないといわれる本書の書評が学会誌や島関連の主要誌に掲載され, 貴重な研究成果が広く紹介されてきたところである。したがって, 現時点においては出版から 3 年余の月日が流れていることになるが, 改めて本書の概要をご紹介しますとともに, 筆者の所感をいくつか述べてみたいと思う。

「数年間にわたる島歩きの成果」であるという本書の構成は, 以下の通りとなっている。



【目次】

謝辞

第1章 島——その夢と現実

第2章 島——その形成と性質

第3章 島嶼性——そのプロセスと影響

第4章 島の過去

第5章 島——人々と移住

第6章 コミュニケーションとサービス

第7章 政治と小さな島々

第8章 島で暮らすこと——現代の島の経済

第9章 夢の島——観光は島の問題解決への万能薬か?

第10章 結論——セントヘレナ島, ふたたび表舞台に
訳者あとがき

参考文献

島名索引

まず第1章は, 島の研究における基本事項の紹介であり, 著者は島の数よりもその本質を捉えることが重要であるとし, 難解とされている島の定義づけを試みている。島とは水域に囲まれ, かつ明瞭な境界を持ち,

より大きな陸塊である大陸や主島から隔絶された場所であるとのスタンスに立っている。そして、このことが島を特別な存在とし、人々を惹きつけて休暇で訪れる者にとつての「夢の島」ともなっているが、現実として、生活者にとっては狭く閉ざされた空間であるため、そこには必要な生活資源・サービスを満たすことを困難とする状況があるという。小さな島々が、大きな島や大陸側からの強い政治的・経済的作用を受けて周辺の立場に置かれているためであり、著者の主張する「島嶼性による制約」へと収束されていく。

第2章は、本書の大部分が人文現象を取り扱うなかで、唯一、島々の自然的基盤に関する章である。地球のプレート運動を交えながら島々の誕生についてタイプ別に解説されており、とくに筆者は南太平洋のフランス領タヒチの島々など、熱帯海域の環礁の形成過程の記述に印象が残っている。陸上の人間界にとつての「小さな島」は、じつは海底から立ち上がった部分を含めると日本の富士山級かそれ以上に大きな陸塊であることも多く、なおかつ湧昇流を伴う豊かな海がとり巻いている。いずれの島も、社会的な制約を被る島、あるいはテリトリーとしての島を超越した、ダイナミックな実体であることを考えさせられる章である。続けて本章では、人間社会が持ち込んだ動植物による生態系の攪乱や地球温暖化による海面上昇の問題も挙げられているが、いまますこし問題の経緯や、現代の世界システムのあり様に通じていく大洋の島々で繰り広げられてきた海島資源の収奪についての記載も必要であるように思われる。

第3章からは、島々が島嶼性によって制約状態へと至ることになる結果的事象であり、島嶼性の主たる構成要素である隔絶性の影響を中心として、本題に関わる事例が数多く紹介されていく。ここではオフショアの島々の貿易、避難所、踏み石、監獄、軍事基地、核実験など、隔絶性の利点が活用されている逆の事例についても示されている。続いて本章では、小規模性の問題が取り上げられ、島々の「モノカルチャー経済」なども議論されていくが、限られた島内資源をどのように人間社会が見出して活用し、ネットワーク形成において島外との補完関係が構築され、やがてそのバランスが崩れていくのかという、結果へと至るまでの一連のプロセスが全ての事例に添えられておらず、時に若干の唐突感が残される。

第4章は、「島内の資源に相当程度依存していた歴史時代」の島々の様子である。海は障壁ではなくハイウェイであり、交易の隆盛において「最も遠隔にある島でも、世界からまったく切り離されてはいなかった」との記載が興味深い。そうした事例はむしろ島嶼性が活かされていた実態の証左ということになるが、しかしながら近代期に入っていくと、大航海時代後の三角貿易やその後の工業化によって、しだいに欧米諸国の防衛拠点や「踏み石」として、あるいは領土取引の「チェスの駒」としての島へと、その多くが変貌していくこととなる。一方で、限られた環境資源の有効活用に向けて、住民の複合的な職業形態や、共同社会

としての機能が卓越していくアイルランドのアラン諸島などの事例が挙げられており、著者が少なからず島嶼性が活かされている現象についても注目していることがよくわかる。1840年代のジャガイモ飢饉では「孤立」が3島を救ったと結語しているが、むしろ島嶼性を踏まえて堅実に立ち上げられていた小さな島々の社会システムこそが人々を守っていった貴重な事例という表現が的確ではないかと思われるのがであろうか。

第5章は、島々における人口流出の諸側面である。「一つのバスケットにすべての卵を入れる」という特定の産業部門への依存問題が、アイルランド島や日本の長崎県高島と端島の炭鉱開発の事例などを通して説明されていく。無人島へと至らないまでも、外からの送金や公共投資、年金によるいわゆる「MIRAB経済」が形成され、島々では社会的衰退が止まらない。希少な人口流入の事例にもふれながら本章では人口問題が議論されていくが、島嶼性の表出を確認するための経緯の必要性をこころでも感じるとともに、島嶼性が諸問題をもたらしていったというよりも、むしろ人間社会の側のあり方の問題ではないかとの印象が強まってくる。

第6章は、輸送や通信、教育、医療体制などが取り上げられ、島々の生活面にみられる現状の課題が説明されている。島々相互のネットワーク形成に直接関わる輸送のあり方の問題、また遠隔通信により島々の隔絶性を緩和していく新しいネットワーク形態の出現など、大変注目される章である。アイルランドでは全ての有人島にヘリの発着基地が整備・運用されて医療体制が向上していること、また、すでに1990年代に各家庭にコンピューターが導入されたカナダのプリンスエドワード島の事例や、西インド大学(UWI)および南太平洋大学(USP)といった広域の遠隔教育の事例なども紹介され、島嶼性の可能性も同時に示される内容となっている。

第7章は小さな島々の深刻な政治的問題である。ここではスケールや隔絶性、辺境性などの問題が島々のハンディキャップになっているとされ、島々共通の問題として「植民地」を取り上げて、さまざまな支配・従属関係のケースが議論されていく。本章では「内なる植民地」として、沖縄の軍事基地化の問題にもふれられている。1980年代には「アイルランド島嶼議会」が結成され、国内の政治組織を島々全体のものとして改変していく、いわば「島嶼性の機能回復」に向けた動きもみられるが、植民地とされた島々の世界的動向としては、分割や領有争いのケースが随所にみられ、独立国家となつてからも根深い社会的・経済的問題からの脱却の途上であることが述べられている。

第8章は、現在の小さな島々にみられる厳しい経済活動の状況である。資源利用が継続する事例とそうでない事例、「規模の経済」といわれる問題を克服するための経営規模の拡大・縮小とブランド化の取り組み、さらに新しいオフショアファイナンスの動向などが紹介されている。

第9章は、島々にとって制約になるとされてきた小規模性、周辺性、隔絶性などが問題にはならないという「観光」が取り上げられ、これまでの章とは趣を異にしている。とくに注目されるのがクルーズであり、著者はカリブ海クルーズについて、島ごとに市場を持つ必要がなく、規模の経済が享受できるものとして説明している。しかしながら、観光は島に魅力的で新しい生業をもたらすこともあれば、外部依存へとつながり、社会・経済、有限の環境にも影響を及ぼして翻弄されていく事例も枚挙に暇がなく、「諸刃の剣」であるという。

第10章は、これまで議論されてきた、小さな島々に共通してみられる島嶼性による制約の問題について、南大西洋に浮かぶセントヘレナ島を総合的に考察することによりまとめている章である。航海する船への物資の供給基地から亜麻を輸出する島となっていった同島では、19世紀半ばには年間1,000隻以上の船が島に寄港し、人口も20世紀初頭には1万人近くみられたという。しかしナイロンとゴム製品の登場によって、現在ではイギリス本国からの援助に依存する「MIRAB経済」に陥ってしまったことが象徴的に述べられている。

以上が各章の概要と全体的流れとなる。島嶼性による制約に関連付けられた、世界の島々の多種多様な事例が登場し、小さな島々で発現している特徴的な現象が、しくみというところから不思議に捉えられてくる。しかし実際には制約によるマイナス状況のみならず、島嶼性が及ぼすプラスの側面も数多く紹介されており、読者に島嶼性についての考えを促していく、著者独特の島嶼地理学の誘いではないかとも思えてくる。

ただし方法論として、これまで幾度もふれてきたように、筆者としては問題状況へと至っていく歴史的プロセスを議論に組み込むべきではないかという印象が最後まで強く残ることとなった。というのも、島内資源を踏まえた人々の活動やコミュニティのあり様、島外との補完的ネットワークについて詳しく考察していくことによってこそ、島嶼性の表出が捉えられてくるものといえ、そこからはまた、隔絶性をはじめとする構成要素の関係性や順次性、さらには大元である島嶼性の全容も垣間見えてくるのではないかと考える。

著者は形や大きさ、内部資源、人間社会の関わり方もさまざまな島は、まさに島を非常に遅れた状態にすると同時に非常に進んだ状態にもするとふれているが、そうであるならば、その島単独で日常生活が完結することはありえず、相対するより大きな島との関係性の中にも小さな島を「遅れた状態」にしていく外部的な問題要因があるはずであり、「進んだ状態」についてもまた然りではないかと考えられてくる。それぞれの島のみを単独で捉えていくのではなく、島々の関係性や人間社会と島との関わりを長い時間スパンで丹念に捉えていくという大切な視点が、本書を通して得られたように思われる。

それにしても、本書に登場してきた様々な制約を受けている小さな島々について、戦後に「離島」と称されるようになった日本の多くの島々もまた同様であるように感じたのは筆者だけであろうか。本書は改めて、足元の島や、島というところから現代の世界システムについて考えていくことの重要性に気づかせてくれる貴重な一書であり、学びは尽きない。

(前畑明美)